不登校大学生に対する大学教員の視点と支援

荒井佐和子・石田　弓・大塚泰正・岡本祐子・兒玉憲一

Perceptions of university faculty regarding school-nonattendance and supports for non-attendant students

Sawako Arai, Yumi Ishida, Yasumasa Otsuka, Yuko Okamoto, and Kenich Kodama

本研究では不登校学生を理解するための大学教員の観点を明らかにした上で不登校学生をタイプ分けし，各タイプに対する教員の支援方法について検討することを目的とした。79 名の大学教員から回答を得，そのうちの 51 名の教員に不登校学生の担当経験があった。調査の結果，教員は「無気力」，「適性の問題」，「心理的問題」，「対人スキルの問題」という 4 つの観点から不登校学生を理解していた。また，教員から見た不登校学生は「アパシー群」と「心理的問題群」，「不明群」にタイプ分けされ，各群に対する教員の支援方法は異なっていた。このことから，教員が不登校学生を支援する際には，不登校学生の特徴を教員の観点から把握し，その特徴に応じた支援を行っていることが示唆された。

キーワード：大学生の不登校，大学教員，支援

問題

「大学生の不登校」は，1994 年に小柳・森田（1994）によって提示された問題であり，大学生が長期にわたり出席すべき授業に出ない現象を指す。大学に設置されている学生相談機関による調査（小柳・森田，1994 など）によって，およそ大学生の 1%程度，不登校問題を呈することが明らかになっている。近年では，「大学生の不登校」は学生相談関係者の間ではポピュラーな言葉となり（渡辺，2010），各大学の学生相談室・保健管理センターでは，教職員対象の不登校学生への対応に関する研修を行うなど，不登校問題に対する予防を含めた取り組みが全国に広がっている。

このような流れの中，学生相談領域では，不登校問題を呈した大学生の理解について検討が行われ，しっかりとした見立てあるいは診断に基づいた対応が重視されている（渡辺，2010）。

その一方で，一番身近な存在であり，学生の不適応に最初に気付いて支援を行うことが期待されている大学教員が，不登校学生の抱える問題をどのように見立てて支援を行っているのか，その検討はほとんど行われていない。

そこで，本研究では不登校学生を理解するための教員の観点を明らかにした上で不登校学生をタイプ分けし，各タイプに対する教員の支援方法について検討することを通して，教員が不登校学生

をどう理解し，支援しているのか，その一端を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

地方国立大学教育学部・教育学研究科所属の教員

用語の定義

「不登校」の定義　大学生の不登校の概念は研究者により意味するところが少しずつ異なり（渡辺，2010），定義も様々である。本調査の対象者は教育学部・教育学研究科所属の教員であることから，対象者が馴染のある，文部科学省の「不登校」の定義を参考にし「何らかの心理的，情緒的，身体的，あるいは社会的要因・背景により，学生が授業に出席しない，あるいはしたくてもできない状況にあること（ただし，病気や経済的理由によるものを除く）」とした。また，不登校の期間は1か月以上の欠席を基準としたが，これを下回る期間の不登校でも可，とした。

「担当学生」の定義　本研究における「担当学生」は，これまでに学部チューターあるいは指導教員として担当した学部生・大学院生及び専攻科生，あるいは，調査対象者が所属のコースや専攻の必修科目の授業で担当した学生を指すこととした。

質問紙の構成

初めに不登校問題を呈した担当学生の有無を尋ね，該当する担当学生がいる（いた）回答者に対して，その学生の特徴および回答者が実際に行った支援内容について回答を求めた。具体的には，支援の実態を明らかにするために，これまでに担当した不登校学生の中で，最も関わることの出来た担当学生を一人思い浮かべてもらい，その学生に関して以下の質問項目に回答を求めた。(a) 不登校学生の属性および不登校状況，(b) 回答者からみた学生の特徴（11項目（①学力の低さ・偏り，②教員とのコミュニケーション能力の低さ，③規範意識の低さ，④行動や生活の乱れ，⑤全般的な学習意欲の低下，⑥不本意入学，⑦コース選択・研究室選択の問題，⑧将来・進路の不安，⑨精神的な問題を抱えている，⑩全般的な自信の低さ，⑪対人関係の問題）について「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法にて尋ねた），(c) 学生に行った指導および支援の内容（15項目（①呼び出した，②つながりを大切にした，③学内の専門機関を紹介した，④学内の専門機関に同行した，⑤回答者が学内専門機関に相談した，⑥不登校学生の友人等から情報を収集した，⑦気持ちを支えた，⑧意欲の喚起を図った，⑨不登校学生を取り巻く人間関係の調整を行った，⑩学習の支援をした，⑪規範について指導した，⑫学外の相談・医療機関と連携を図った，⑬家庭と連携を図った，⑭自宅を訪問した，⑮その他）について「実施した」，「実施しなかった」の2件法にて尋ねた），(d) 回答者の性別，年代，現在の職階。なお，(b)，(c) の項目は，調査実施大学が教員を対象に発行している学生への対応に関する手引き書および学生相談領域での経験が豊富な大学教員（臨床心理士）2名と筆頭著者が協議の上，項目を設定した。

調査手続き

質問紙の配布は，各教員が大学事務室に個別に所有しているメールボックスを利用し，回収には

メールボックス近くに回収箱を設置し回収した。

分析方法

統計学的検定は IBM SPSS Statistics19 を用いた。

結果

回答者の概要

207 部配布し，79 部の回答を得た（有効回答率 38.2%）。79 名の回答者のうち，不登校問題を呈した担当学生（以下，不登校学生）がいた教員は 51 名（回答者の 64.6%）であり回答者の半数以上が不登校学生を担当した経験があることが分かった。以下，本研究では，不登校学生の担当経験があった 51 名の回答者を分析対象とした。

不登校学生に対する教員の観点

はじめに，教員が不登校学生をどのように理解しているのか，その観点を抽出するために回答者からみた不登校学生の特徴（11 項目）について因子分析を行った。初期の固有値順に 3.54，1.75，1.31，1.02，0.74 であり第 4 因子までの回転前の累積寄与率は 69.20%であったので，これらを手がかりに 4 因子を抽出した。そのプロマックス回転後の因子パターンを Table 1 に示した。

Tabel 1

教員から見た不登校学生の特徴の因子分析結果

	因子			
	F1	F2	F3	F4
第1因子「無気力」（α=.81）				
行動や生活の乱れ	.91	.11	.28	-.35
規範意識の低さ	.73	.01	-.22	.34
全般的な学習意欲の低下	.68	-.05	-.07	.19
第2因子「適性の問題」（α=.70）				
コース選択・研究室選択の問題	-.08	.72	-.15	-.04
不本意入学	.03	.65	-.10	-.11
学力の低さ，偏り	.20	.52	-.08	-.05
進路・将来の不安	.14	.43	.09	.23
第3因子「心理的問題」（α=.55）				
精神的な問題を抱えている	.10	-.27	.84	.12
全般的な自信の低さ	-.16	.31	.53	.36
第4因子「対人スキルの問題」（α=.50）				
対人関係の問題	.04	-.15	.14	.68
教員とのコミュニケーション能力の低さ	-.01	.26	.07	.40
因子間相関 F1		.41	-.19	.23
F2			-.03	.54
F3				-.09

第1因子は「行動や生活の乱れ」,「規範意識の低さ」,「全般的な学習意欲の低下」に高い負荷量が見られた。これらは，全般的な意欲の低下と関するものであると考えられた。そこで,『無気力』と命名した。

第2因子は「コース選択・研究室選択の問題」,「不本意入学」,「学力の低さ，偏り」,「進路・将来の不安」に高い負荷量が見られた。これらは，大学や所属コース・研究室との適性・相性の問題と関するものであると考えられた。そこで,『適性の問題』と命名した。

第3因子は「精神的な問題を抱えている」,「全般的な自信の低さ」に高い負荷量が見られた。これらは，心理的な問題に関する者であると考えられた。そこで『心理的問題』と命名した。

第4因子は「対人関係の問題」,「教員とのコミュニケーション能力の低さ」に高い負荷量が認められた。これらは，対人スキルに関わるものであると考えられた。そこで『対人スキルの問題』と命名した。

教員から見た不登校大学生のタイプと支援方法

クラスタ分析　不登校学生を理解する際，単一の問題によって特徴づけられると考えるより，複数の問題を抱えていると考える方が妥当であると考えられることから，因子分析で得られた因子得点を用いてクラスタ分析により不登校学生の分類を試みた。ウォード法によるクラスタ分析を行った結果，3つのクラスタが抽出された（Figure 1）。クラスタ1（n=22）は,「無気力」や「適性の問題」,「対人スキルの問題」が高く,「心理的問題」は低かった。このことから，適性の問題が背景としたアパシーの特徴を持つ群であると考えられたため『アパシー群』とした。クラスタ2（n=26）は，逆に「心理的問題」が高く，その他の因子は低いことから『心理的問題群』とした。クラスタ3（n=3）は，目立った特徴が認められず,『不明群』とした。

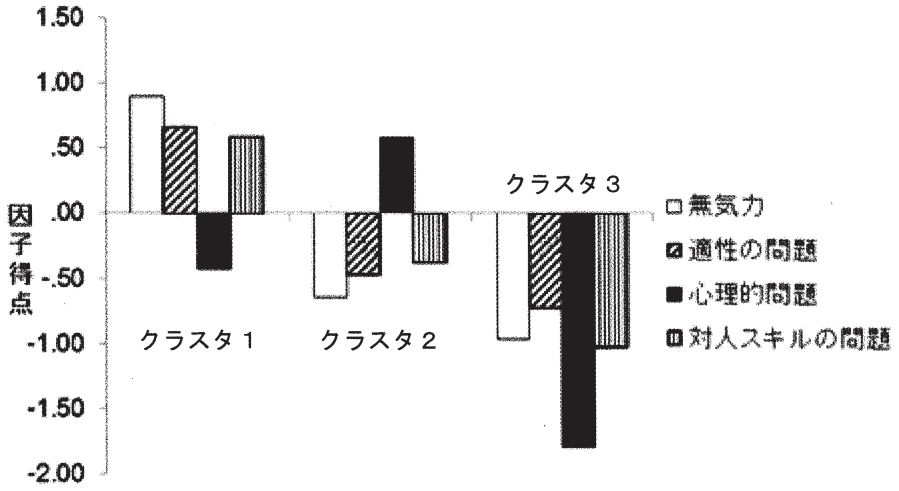

Figure 1 クラスタ分析の結果

Table 2
不登校問題を呈した後の経過

	アパシー群(n=22)	心理的問題群(n=26)	不明群(n=3)
卒業・修了	4	12	0
中途退学	7	6	2
休学中	1	3	0
不登校のまま在学中	8	5	1
不明	2	0	0

各クラスタの特徴　各群に属する学生の特徴を明らかにするために，不登校学生の性別及び不登校問題を呈した後の経過について，χ^2 検定を行った。その結果，性別に有意な偏りが認められた（χ^2=11.66, p<.01）。アパシー群では男性が 17 名，女性は 5 名と男性の割合が高く，心理的問題群では男性が 7 名，女性が 18 名と女性の割合が高かった。なお，不明群では男性 2 名，女性 1 名と偏りは認められなかった。不登校問題を呈した後の経過（卒業・修了，中途退学，休学中，在学中，不明のいずれか）に，3 群間で有意な偏りは認められなかった（χ^2=10.73, *ns*）（Table 2）。

各クラスタに対する支援方法の特徴　各群に属する学生に対して教員が行った支援内容の違いを検討するために，予め設定した支援方法 14 項目の実施状況を χ^2 検定にて比較した（Table 3）。その結果，「②つながりを大切にした」，「③学内の専門機関を紹介した」に有意な偏りが認められ，2 項目ともアパシー群における実施率が低く，心理的問題群における実施率が高かった。

実施し有効だと感じた支援方法　回答者が行った支援の有効性の評価を「役立った」から「役立たなかった」の 4 段階評定にて求めたところ，アパシー群は 22 名中 9 名が，心理的問題群は 25 名中 13 名が自身の行った支援が学生の不登校問題の解消に「役立った」あるいは「やや役立った」と評価しており，この 2 群では約半数が有効性を感じ，残りの半数は有効性を感じていないという結

Table 3
不登校学生に対し教員が行った支援（人）

	アパシー群		心理的問題群		不明群		
	実施した	実施しなかった	実施した	実施しなかった	実施した	実施しなかった	χ^2値
① 呼び出し	19	3	19	7	3	0	2.12
② つながり大切	16	6	25	1	3	0	6.03 *
③ 学内専門機関の紹介	8	14	16	9	0	3	6.53 *
④ 学内専門機関へ同行	3	19	3	22	0	3	0.47
⑤ コンサルテーション	4	18	8	17	0	3	2.23
⑥ 友人から情報収集	20	2	23	3	2	1	1.50
⑦ 気持ちを支えた	16	6	24	2	3	0	4.05
⑧ 意欲喚起	17	5	20	6	3	0	0.88
⑨ 人間関係調整	8	14	9	17	2	1	1.20
⑩ 学習支援	10	12	13	13	2	1	0.50
⑪ 規範指導	7	15	2	23	1	2	4.50
⑫ 学外連携	2	20	8	18	0	3	4.33
⑬ 家庭連携	10	12	20	6	2	1	5.07
⑭ 自宅訪問	4	18	4	22	0	3	0.66

Table 4
不登校学生に対し教員が有効だったと思う支援内容（人）

	アパシー群	心理的問題群
① 呼び出し	6	0
② つながり大切	6	8
③ 学内専門機関の紹介	1	4
④ 学内専門機関へ同行	0	0
⑤ コンサルテーション	0	1
⑥ 友人から情報収集	3	4
⑦ 気持ちを支えた	5	9
⑧ 意欲喚起	2	0
⑨ 人間関係調整	0	1
⑩ 学習支援	0	4
⑪ 規範指導	0	0
⑫ 学外連携	0	0
⑬ 家庭連携	5	5
⑭ 自宅訪問	2	0

（３つまで複数選択可）

果であった。なお，不明群は「役立った」あるいは「やや役立った」という回答はなく，「あまり役立たなかった」が 2 名，「役立たなかった」が 1 名であった。

実施し有効だと感じた支援方法　上記のように自分自身が行った支援の有効性評価で「役立った」，「やや役立った」と評価した回答者を対象に，特に有効であった支援方法を 3 つまで選択式にて回答を求めた。その結果，アパシー群でも心理的問題群でも「②つながりを大切にした」，「⑦気持ちを支えた」を選択する回答者が多かった。また，アパシー群では「①呼び出した」，「⑭自宅を訪問した」が有効であったという回答が特徴的であり，これら 2 項目は心理的問題群に対しては有効と評価されない項目であった。また，心理的問題群では，「③学内専門機関を紹介した」，「⑩学習の支援をした」が有効であったという回答が特徴的であり，これら 2 項目はアパシー群に対しては有効と評価されにくい項目であった（Table 4）。

考察

本研究では，不登校学生に対する大学教員の観点を明らかにした上で，不登校学生を群分けし，教員が各群に行った支援方法について検討した。以下に，各分析結果ごとに考察を述べる。

大学教員の観点　まず，教員から見た不登校学生の特徴について因子分析を行ったところ，「無気力」，「適性の問題」，「心理的問題」，「対人スキルの問題」という 4 因子が確認された。不登校学生を担当した大学の学生相談部門のカウンセラーおよび精神科医を対象にした磯部・内野・鈴木・藤巴・岡本・林・土井・黒崎・品川・酒井（2006）の調査においても，対象者が担当したケースの不登校の契機としては「学業の躓き」，「精神保健上の問題」，「孤立・対人関係」，「研究室配属」，「入学以来」が挙げられている。本研究で各因子を構成している項目内容から，今回得られた因子の中の「無気力」と「心理的問題」が磯部他（2006）では「精神保健上の問題」にまとめられ，逆に今

回得られた因子の中の「適性の問題」が磯部他（2006）では「学業の躓き」,「研究室配属」,「入学以来」に分けられていると推測されるが，今回の調査で得られた学部・研究科の教員が持つ不登校学生に対する観点と学生相談部門のカウンセラー・精神科医が持つ不登校学生に対する観点は重複する部分が大きいと考えられる。このように非学生相談領域の教員と学生相談領域のカウンセラー・精神科医との間で同様の視点が抽出されたことは，両者とも，類似の観点・枠組みから不登校学生を理解していることを示唆していると考えられる。また，学部・研究科の教員が学生相談部門と連携する場合には，この不登校学生に対する観点を活用することで，連携がよりスムースに行えるのではないかと考えられる。なお，今回の調査で得られた因子の中の「心理的問題」と「対人スキルの問題」のα係数はやや低く，これには項目数の少なさも原因として考えられる。今後，項目数を増やしてさらに検討する必要がある。

不登校学生の分類と各群の特徴　次に，上記の教員の観点を用いて不登校学生をクラスタ分析により分類したところ,『アパシー群』,『心理的問題群』,『不明群』の 3 群が得られた。

『アパシー群』は,「無気力」,「適性の問題」,「対人スキルの問題」が高く，男性の割合が高かった。従来から進路選択や学業不振から無気力になる「スチューデント・アパシー」は男性に多いことが知られており（山田，2001），本群は伝統的なアパシーの特徴を有する群であると考えられる。また，アパシーの学生は，現実には不適応が生じているが，困難から逃避しているということさえ意識しないようにしているため,こころの痛みを感じないという特徴を持つと言われている(小柳，2001)。アパシー群で「心理的問題」が低かったことも，このようなアパシーの学生の特徴が反映されていると思われる。

一方,『心理的問題群』は，アパシー群と逆の傾向，つまり心理的な問題だけが目立つ群であり，心理的な問題を特徴とする群であると考えられた。適性の問題や意欲の低下の問題は目立たないにも関わらず，この群の学生の中にも中途退学する学生が 2 割程度（26 名中 6 名）存在し，残る 20 名の中にも現在休学中，在学のまま不登校状態の学生が 8 名いるなど，経過を楽観視できない群である。なお，先行研究において不登校学生の大半は男子学生であったが（鶴田・小川・杉村・山口・赤堀・船津・鈴木，2002），本研究では女子学生の割合も半数を占め，特に「心理的問題群」の女性の占める割合が高かった。本調査が教育学部・教育学研究科の教員という限られた対象に対し，教員が最も関われた学生について回答を求める形式を採用したため，鶴田他（2002）の結果と単純に比較することは出来ないが，性差についても今後さらに検討する必要がある。

また,『不明群』は，教員からみた問題は認められず，明確な特徴が見出せない群であり，強いて言えば教員から見て目立った問題が無いにも関わらず学校に来なくなる学生の一群であると考えられる。この群に分類される学生は 3 名と少ないが，この群の学生は 3 名中 2 名が中途退学し，残りの 1 名も在学したまま不登校の状態であり，卒業・修了している学生はいなかった。この群は，教員にとって不登校の背景が理解しにくい学生である可能性と,今回設定した 11 項目の特徴以外の特徴・理由によって不登校を呈した学生である可能性が考えられる。今後，教員から見た学生の特徴の項目を増やす，事例検討を行うなどして，不明群の学生についてより詳細な特徴の把握が必要と考えられる。

不登校学生に対し教員が行った支援　次に，各クラスタ群に対する教員の支援の実態について検討したところ，いくつかの支援方法で偏りが認められた。このことから，教員が不登校学生を支援する仕方には，不登校学生への理解の仕方が関わってくることが示されたと言える。

「つながりを大切にした」という支援方法は心理的問題群に対し高頻度で実施され，逆にアパシー群では実施率が低かった。これは，心理的問題群に対し教員が心理的問題という理解に基づいたアプローチを行っている表れとも考えられる。また，アパシー群に対する実施率が低かった背景には，無気力で教員とのコミュニケーションも十分に取れないという本群の特徴から，教員がつながりを大切にしたくても，つながること自体に困難があるという背景もあると考えられる。

また，「学内の専門機関の紹介」という支援方法も，心理的問題群に対しては高頻度で実施され，逆にアパシー群に対しては実施率が低いという結果であった。これも，教員が心理的問題だと理解した場合，学内の専門機関を紹介しやすいが，心理的問題が前面に出ないアパシー群の学生に対しては，紹介しにくいという理由が考えられる。加えて，前述のように，アパシー群ではつながること自体に困難があるため，紹介に結びつかないまま中途退学に至ってしまうケースもあると推測される。回答の中には，学内の相談機関につなげるまでに大変な苦労がありました，というコメントもあり，アパシー群の支援においては学部・研究科教員の負担が大きいことがうかがわれる。有意差は認められなかったが，アパシー群に対してはほぼ半数の教員が家庭連携を行っており，このことも，本人とのつながりにくさと関連しているのではないかと考えられる。

実施し有効だと感じた支援方法　教員が実施した支援方法の中で，不登校問題の解消に特に有効であった支援方法としては，アパシー群でも心理的問題群でも，「つながりを大切にした」，「気持ちを支えた」が多かった。このことから，不登校のタイプ（群）に関わらず，不登校学生との関係づくりが大切であると教員は認識していると考えられる。

不登校のタイプによる特徴としては，アパシー群は「呼び出した」，「自宅を訪問した」が有効であったという回答が特徴的であった。これは，アパシー群の学生が持つ特徴から，接触を積極的に試みる支援方法，つながるための方策が不登校の解消に有効な場合もあることを示していると思われる。また，心理的問題群では専門的機関の紹介と学習支援が有効であったという回答が特徴であった。アパシー群と異なり，心理的問題群では，つながった後の支援が重要であるとも考えられる。なお，不明群では人数が少ないため，実施した支援方法の偏りについて十分な検討は行えなかったが，不明群の学生に対して教員は複数の支援方法を実施していた。それにもかかわらず，有効性の評価では，教員自身の行った支援を有効と評価した教員は０名であった。このことから，不明群を支援する教員は，支援の手ごたえを感じられない場合が多い可能性が考えられる。

今後の課題　本研究は，地方国立大学の教育学部・教育学研究科の教員という限られた対象とした研究である。また，今回の分析対象者は 51 名と少なく，因子分析で得られた教員の観点も暫定的なものであった。そのため，今回得られた観点及び群を大学教員からみた不登校学生の特徴と一般化することは難しく，今後は複数の大学，他の学部の教員まで対象を拡大し，今回得られた結果を検証し，必要に応じ修正していく必要がある。

また，本研究は，不登校学生を担当した経験のある教員を対象として後方視的に調査を実施した。

得られた群によって，不登校問題を呈した後の経過に有意な差は認められなかったが，教員の支援が功を奏し不登校学生が卒業・修了したケースと，支援はしたものの中途退学に至ったケースでは，教員の持つ印象も異なる可能性がある。そこで今後は，縦断的手法による調査を行うことが望ましいと考えられる。

注）本研究の遂行にあたっては平成23年度広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト推進経費の助成を受けた。

引用文献

磯部典子・内野悌司・鈴木康之・藤巴正和・岡本百合・林マサ子・土井　由・黒崎充勇・品川由佳・酒井祥子（2006）．学生相談から見た不登校の現状　総合保健科学（広島大学保健管理センター研究論文集），**22**，91-98.

小柳晴生（2001）．大学生の不登校　国立大学保健管理施設協議会（編）学生と健康　改訂第2版　南江堂　pp. 232-233.

小柳晴生・森田敏郎（1994）．休学者および出席不良学生のスクリーニングおよび相談システムの研究　香川大学保健管理センター1993年度教育研究特別経費研究報告書

鶴田和美・小川豊昭・杉村和美・山口智子・赤堀薫子・船津静代・鈴木國文（2002）．名古屋大学における不登校の現状と対応　名古屋大学学生相談総合センター紀要，**2**，2-15.

渡辺　厚（2010）．不登校問題への対応　*CAMPUS HEALTH*，**47**，70-72.

山田和夫（2001）．スチューデントアパシー②何となく学業全体に意欲を失う　国立大学保健管理施設協議会（編）学生と健康　改訂第2版　南江堂　pp. 236-237.